英霊にこたえる会たより

英霊にこたえる会
102-0073 東京都千代田区
九段北 3-1-1
靖國神社遊就館内
電話・FAX
03-3261-7415
郵便振替 00120-7-160184

新たな国立の戦歿者追悼施設は、
心ある多くの国民の声と力を
結集して、断固阻止しましょう。

第40回総会講演

「日本よ、のびやかなれ」

（公財）国家基本問題研究所理事長　櫻井 よしこ

英霊にこたえる会は、平成26年4月23日「グランドヒル・市ケ谷」で第40回総会を開いた。恒例の記念講演は、第40回総会で副会長職を委嘱した（公財）国家基本問題研究所の櫻井よしこ理事長にお願いした。本資料は、その講演内容である。（小見出し及び注釈は事務局）

はじめに

皆様こんにちは。今日は中條先生のお言いつけで、この「英霊にこたえる会」の副会長へのご推薦を心して、お受けさせていただきました。身に余る光栄でございます。「英霊にこたえる会」の重みというものを考えますと、副会長のひとりではありますけれども、軽々にはこのお役を引き受けることはできないという気持ちで参りました。今、日本国がどのような状況に立たされているかと言うことを考えますと、「英霊にこたえる会」の皆様方の、立ち位置というのが、非常に大事であることが分かります。日本国が日本国であるゆえん、日本国民が日本国民であるゆえん、それは皆様方が大事にして来られた価値観、それなしには考えられないわけでございます。今、国際情勢が非常に大きく変わっていますが、日本は戦後本当にまったき意味での国家であったのか、私たち日本人は立派な日本国民であったのかを、問わなければならない局面に立っていると思います。今日は、何でもよろしいから話をしなさいと言うことで、1時間お時間をいただきました。なぜ私たちが今、皆様方のなさっているこの「英霊にこたえる会」が大事にしてきた価値観を、もう一回思い出さなければならないのかと言うことについて、お話を申し上げたいと思います。

オバマ政権第2期「アメリカは世界の警察官ではない」

今日、オバマ大統領が来日を致します。夕方においでになって、非公式な夕食会を安倍総理となさって、その後、明日1日国賓としてのお時間を過ごされて、明後日の午前中には韓国に向けて出発するという、慌ただしい

日程でございます。

今アメリカが、歴史的な変化をたどっています。第1期のオバマ政権と、第2期のオバマ政権を比べてみますと、まるで別人のような変化をオバマさんは見せていると思います。その変化を一言で言うなら、アメリカが非常に内向きになってきたと言うことなのです。これまで日本は、アメリカの力によって、平和と安全を守り通してきたと言っても過言ではないと思います。古庄さん（注・古庄幸一元海上幕僚長・現隊友会常務理事・来賓出席）がおられて自衛隊の方々にとっては、このような言い方は、非常に口惜しいものだと思いますけれども、日本国憲法のあり方、自衛隊法のあり方、その他社会の価値観の置き方と言うものを考えますときに、まさに戦後の日本は、日米安保条約に頼って我が国の安全を基本的に担保してもらってきた。その代わりに日本国は、経済大国になった。そして、安全保障、それから外交の、いわばアメリカの顔色を見ながら、アメリカの行く方向にくっついてきたというのが本当のところではないかと思っております。

いろいろな意見の方々が日本国にはおりますけれども、左翼的な方々はいつもこう言っていました。日米安保条約などはいらない。日米安保条約があるが故に、もしかして我々はアメリカの戦いに引きずり込まれるかもしれない。在日米軍基地の存在するおかげで、我々がアメリカの戦いに巻き込まれてしまうかも知れない。そのような意見を言う人々が、少なからずいたわけです。そしてまた、一般の方々もアメリカとの関係の中で、私たちは守られているのであるから、自ら日本国の安全を守る必要もないし、自ら武力を構築する必要もないのではないかと考えていた、そうした価値観が蔓延していたと思います。またアメリカも、自分が世界の警察官であると言う事を任じてきました。

あのベルリンの壁が崩れて、ソビエトが崩壊し、アメリカが世界のたった1つの超大国として残りました。その後の国際社会において、アメリカはまさに世界の軍事費の半分を一国で使って、アメリカの国民の努力と、アメリカの軍隊の故に、ヨーロッパも、中東も、アジアも、基本的に秩序の枠組みを、守ってもらった時代がずっと続きました。

ところがさっき申し上げましたように、オバマ政権第2期に入りまして、劇的に変わりました。これが同じ人物であろうかと疑うぐらいの変わり方であります。第2期オバマ政権の時の大統領の就任演説。これは、去年の1月20日に行われたわけですけれども、その就任演説を読んで、私たちは大変びっくり致しました。さっき中條さんがご紹介くださいました、シンクタンク国家基本問題研究所では、オバマ大統領の第2期目の就任演説の分析を致しました。そして、あの1月の末から2月初めに掛けて、日本国ではおそらく最初に、アメリカの安全保障及び外交政策が、根幹から変わるのではないかという予測をたてました。もちろんその時点では、確かな兆候というのはどこにもありません。あるのはただ1つ。オバマ大統領が行った、閣僚人事と、オバマ大統領の就任演説でございました。閣僚人事というのは、国務長官、国防長官、この2つの重要なポジションに座っている方々が交代したことです。ヒラリー・クリントンさんからジョン・ケリー氏へ。レオン・パネッタさんから、今のチャック・ヘーゲル氏へ。国務・国防、この2つの最も重要な閣僚が変わりました。人事にはそれなりの意味があるわけでございます。その意味をくみ取るときに、オバマ大統領の1年ほど前の就任演説は、非常に意味深いものがありました。

演説は八割方が国内問題に費やされていました。世界の安全保障、そして外交問題についての部分は、演説の最後の所に、申し訳程

度にくっつけられていただけでありました。私たちは、田久保忠衛先生を中心にこれを分析致しまして、もしかしてアメリカは、第2期において、内向きになるのではないか、その場合の日本への影響、中国への影響、国際社会の各地域における影響には、非常に深刻なものがある、急いで分析をしなければいけないというので、その分析に取りかかりました。そのときから1年と数カ月がたって、今では世界中が知っています。オバマ政権第2期、非常に内向きになった、もうオバマ政権は、世界の警察官の役割を果たす気持ちがないと言うことが明らかであります。

昨年の9月10日にオバマ大統領は、シリアに介入しないこと、軍事的な介入は行わないこと、そしてその理由を全米に向けて語りました。オバマ大統領のスピーチは全米隅々にまで伝わったと思います。その中で、オバマ大統領自身が、もしシリアが化学兵器を使う場合、もしくは、核兵器を使う場合、それはレッドラインを超えたと見なして、アメリカは軍事介入すると言っていたわけですけれども、そのときまでに、シリアが化学兵器を使っていたという証拠もたくさんあったわけです。それでも、昨年9月10日に、オバマ大統領は軍事介入をしないという説明を国民にしたわけです。

理由として、いくつかのことが上げられました。アメリカ1国で解決すべき問題ではない。国際社会全体がやるべきだ、というような、もっともらしい説明はさておいて、私たちが本当にびっくり致しましたのは、オバマ大統領が2度繰り返した言葉でありました。それは何かというと、「アメリカは世界の警察官ではない」という言葉だったのです。これが去年の9月10日であります。アメリカは世界の警察官ではない。この言葉に、世界中が驚いたわけです。中東では、とりわけ、シリアが問題を起こしているわけですから、サウジアラビアもエジプトも、そしてアメリカと切っても切れない盟友だと思われていたイスラエルも、大変に動揺致しました。中東では、明白なアメリカ離れが起きつつあります。アメリカ離れは何を意味するか。例えばエジプトは、ロシアに接近致しました。ロシアと2プラス2を行う事になり、武器装備もこれまではアメリカから買っていたのを、ロシアから買うということになりました。イスラエルはどうでしょうか。イスラエルはなんと言っても、アメリカの奥深くに食い込んでいる勢力です。アメリカにおけるユダヤ人社会と言うのは、非常に強い影響力を持っています。そのイスラエルが、オバマ政権信頼するに足りずと判断したのでしょうか。今、イスラエルは、盛んに中国に接近をしています。アメリカともちろん良い関係を築いておりますし、これからもその関係を維持していくのは当然でありますけれども、今までほとんどアプローチしなかった中国に対して、イスラエルがかなり積極的に接近をし始めました。もちろんサウジアラビアは、アメリカに大変怒っているわけです。サウジアラビアのバンダル王子というNo.2の方が、去年の9月10日のオバマ大統領の演説を受けて、紅の海、紅海の沿岸にあるジェッダという街にヨーロッパの首脳を集めて、サウジアラビアは対アメリカ外交を大きく変更すると宣言したほどです。

このように、世界のエネルギーの供給地域であります中東で、非常に大きな変革が起きている。そしてまた、その後、ロシア及び中国がどのような行為に及んだかと言うことについては、皆様もご承知の通りでございます。ロシアがクリミア半島を併合するに至った。その背後に、アメリカは決して軍事介入しないという思いが無かったとは言えないはずです。その証拠に、オバマ大統領は、ロシアがクリミア併合に動いたその翌日、いち早く宣言致しました。アメリカは軍事的手段を執ら

ない、外交手段を含めてありとあらゆる努力をするけれども、軍事介入はしないと言いました。そして何が起きたか。クリミアは完全にロシアに取られました。今ウクライナの東部地域で、さまざまな紛争が起きています。これがどのような形で処理されるのか、私はロシアの未来展望は明るくないと思っております。プーチン大統領のロシアが、大国としてよみがえることは金輪際ないと思っております。けれども、しばらくの間、ロシアはやはり、アメリカの弱点を頭に入れながら、彼らの思うところを突き進むだろうと思います。

中国も同じであります。中国は、我が国の東シナ海上空に防空識別圏を設定致しました。それをまるで自国の領空のような扱いで、世界を牽制しております。その後も中国が我が国に対して行っていること、これは、武器こそ使っておりませんけれども、本当の意味での戦いであります。今回の商船三井の船舶の差し押さえ、各地における、中国人労働者の日本企業を被告とする裁判提訴、これを中国の司法が認めつつあります。中国の司法というのは、中国共産党の支配の下にあるのはご承知の通りです。すなわち中国における一連の司法事案は、中国共産党の意志を反映したものでありますから、中国は歴史問題、領土問題、そしてまた武力、ありとあらゆる面において日本を追い詰めるべく戦いを始めたと考えるべきでありましょう。こうしたときに、これまでの日本でしたら、何とかアメリカが前面に立ってくれていたわけです。なんと言っても日米安保条約で、アメリカは日本を守る義務を負っているわけですから、日本国の安全、日本国民の命の保証、領土領海の保全、こうしたことについて、私たちはアメリカに頼ることができました。少なくとも、建前の上では、そのような価値観というものが確立されておりました。

しかし先ほど申し上げたように、オバマ大統領が、アメリカは世界の警察官ではないのだと宣言したのです。そしてまた、シリアにも介入しなかったのです。クリミア半島にも介入しなかったのです。その言葉通りに、アメリカは、世界の警察官であることを、やめたと見るべきでありましょう。

米・中2カ国の思惑
新型大国間関係とは

そしてそのアメリカは、今台頭する中国とどのような形で、つきあおうとしているのか。中国の提言した新型大国間関係という、新しい構図の中に、オバマ政権が前のめりになって入って行っているのではないか、そのように思います。新型大国間関係、この新しい提案は、昨年6月に習近平国家主席が、カリフォルニアを訪れて、オバマ大統領と2日間に渡って8時間の首脳会談を行ったときに、言い出したものです。習近平国家主席は言いました。「太平洋は大きな海で、2つの大国を抱き留める余裕があるじゃないか。太平洋は大きな海であるから、2つの大国がそこに共存するだけの十分な広さがある。新しい大国間関係を築きましょう」と言う形でオバマ大統領に言いました。その段階においては、オバマ大統領は、中国のいう新型大国間関係という言葉を使うことはありませんでした。上手に他の言葉に言い換えていた。けれども、少しばかり時間がたちますと、アメリカ政府がこの言葉を使うようになりました。例えば、あの、6月の米中首脳会談から、たった4カ月後の去年の10月、大統領補佐官のスーザン・ライスという方がいらっしゃいますが、この方は、アフリカ系の女性ですけれども、安全保障担当の補佐官であります。

この方が、ジョージタウン大学という所で講演を致しまして、その席で、「アメリカは、中国との新型大国間関係を機能させなければならない」と言ったのです。続いて、去年の

12月に、ジョン・ケリー国務長官、外務大臣ですが、そのジョン・ケリーが言いました。「アメリカは中国との新型大国間関係を積極的に進めたい」。そして今年3月、オランダのハーグで、オバマ大統領と、習近平主席が首脳会談を行いました。その席で、オバマ大統領が言いました。「アメリカは、中国と、この新型大国間関係を積極的に進めたい」。

こうしてたどってみますと、6月の米中首脳会談の段階では、中国が提言した新型大国間関係というのを、アメリカは一応警戒して、そのまま受け入れる事はなかったのですけれども、10月、12月、そして今年の3月と、補佐官と外務大臣と、大統領ご自身が、この中国の提言を、そのまま受け入れていると言うことが分かるようなスピーチを、メッセージを発信致しました。

新型大国間関係の定義とは何かと言うことを、私たちは、知っておかなければなりません。もともとこの考え方というのは、去年出てきたものではなく、そのずいぶん前に、中国側からアメリカに提言されているのです。それは、07年に中国の海軍の軍人で、楊毅という人物がいます。ヤン・イーと言いますけれども、ヤン・イーという中国の海軍の軍人が、アメリカの太平洋軍司令官のティモシー・キーティングという人物に、こう語りかけたのです。「太平洋はハワイを起点として、真ん中から割って、東側をアメリカが取りたまえ。西側を我々中国が取る。こうして太平洋分割統治をすれば、いいじゃないか。」ティモシー・キーティングは、アメリカに帰りまして、上院の外交軍事委員会に、この事を証言致しました。そのときから、中国による、太平洋分割統治論が提唱されたと言うことで、次第にこの情報は広まっていきました。習近平主席が提案したのは、この楊毅対ティモシー・キーティングの会談の場で、楊毅海軍軍人が提案したことに端を発すると考えられると思います。

私が申し上げたいのは、中国は前々から、太平洋をアメリカと共に二分したい、アメリカと中国が世界のルールを決める二大国になるのである、国連よりもＩＭＦよりも、いかなる組織よりもアメリカと中国がさまざまな事について、意思の疎通を図り、基本的な合意に達すれば、この世界を支配することができると、中国はそのように考えてきたと思います。今では堂々と、新型大国間関係を言うようになりました。それにアメリカが乗ったのです。じゃあ中国はこの新型大国間関係の中に、どのような意味を込めているか。先程来申し上げているとおり、国連よりも米中2カ国なのだ。ＩＭＦよりもいかなる国際組織よりも、米中2カ国で決めればいいのだという事です。これは周辺諸国にとって、はなはだ迷惑なことであります。

米中2カ国の思惑で、国際社会を動かして良いのか。良いはずがありません。けれども中国がもくろんでいるのはそう言うことです。

もう一つこの中に、決して見過ごすことのできない条項が入っております。それは、相互に尊重し合いましょう。米中両国は相互に尊重し合いましょう。お互いの利益を尊重し合いましょう。中国には中国の核心的利益があります。アメリカにはアメリカの核心的利益があるでしょう。中国の核心的利益を尊重してください。その代わり、中国はアメリカの核心的利益を尊重します、と言う意味です。中国の言う核心的利益には、チベットが入っています。絶対に譲ることができないもの、軍事力を使ってでも守り通すというのが、核心的利益です。チベットが1つ、台湾がもう1つ、南シナ海がもう1つ、そして尖閣諸島がもう1つであります。つまり、この新型大国間関係の中には、尖閣も含めて、チベットも南シナ海も台湾も、中国のものであるという事をアメリカは認めなければならないと言

う意味合いがあるわけです。

知ってかしらずか、アメリカは、この言葉を使ったと言う事を先程来申し上げておりますが、今ようやく何人かのアメリカ中枢の人々から、これはやっぱり間違いなのではないかという声が出始めました。中国の新型大国間関係についての定義が明らかでないときに、我々はこの明らかでない内容の文言を使っていいのか、やはり違う言葉を使うべきだろうという反省の声がアメリカの中枢から出てきたのは、誠に喜ばしい事だと私は思います。オバマ政権の姿勢は、日中両方に向けて、どのようなものなのかという事を少し吟味しなければなりません。明日、日米首脳会談が行われます。その席でどんなことが出てくるのかによって、またアメリカに対する分析というものは変わってくると思います。その明日の首脳会談を前に、これまでの状況をちょっとご説明したいと思います。

今日の皆様方のこの議題の中にもございましたが、昨年12月26日の安倍総理の靖國神社参拝について、まず東京のアメリカ大使館から、「失望した」というコメントが出されました。アメリカ国務省もその同じコメントを追認致しました。つまりこれはオバマ大統領の気持ちそのものだと考えるべきであります。そしてその後日本がトラブルメーカーであると、日中の摩擦も、日韓の摩擦も日本が悪いのだと、歴史を反省しない日本が反省をしないからこうなるのだと、日本に対する非難が沸き起こりました。これに対して皆さまもそうでしょう。私もそうでありますけれども、「アメリカよ、一体どうしたのか」というメッセージを、私たちは発信したはずです。そのような事をしているうちに、中国はどんどん、自分たちの、いわゆる膨張政策を推進していきました。いろいろな所に膨張政策をやっています。この事をようやく冷静になったアメリカが見始めたのが、総理の靖國参拝から、2カ月3カ月たったころではないかと思います。

米国務省ラッセル次官補の中国批判

オバマ大統領が、日本に来られる前のワシントンから発せられる日本向けのメッセージ、アジア向けのメッセージは、色々と入り組んでいて、アメリカの真意を読み取るのは難しいのですけれども、その中でも注目すべきは、国務省のラッセル次官補が出したメッセージだと思います。

今年1月下旬に、国務省国務次官補のラッセルという方、この方はもともと中国通であり、親中な立場を取っている、親中派だと言うことで理解をしていたのですけれども、この方がアメリカ下院の軍事委員会に証人として出まして、非常に鋭い中国批判を展開したのです。中国が膨張主義に走っている、国際法を無視している、他国の領土領海を窺っている、話し合いもしない、非常に問題である、地域の不安定要因になっている、と、よくぞ言ってくれたと思うような事をラッセルさんがおっしゃったのです。私はそれを聞いたときに、これが彼の本意であるとは実は思わなかったのです。国務省の本意だとも思わなかったのです。なぜならば、それまで対日批判があまりにも激しかったからです。それに対して、日本側から、アメリカは一体何なのだという声が澎湃(ほうはい)として沸き起こったものですから、もしかしてアメリカは、日本をなだめるために、このような次官補レベルのメッセージを届けようとしているのかも知れないということで、1月の下院における証言に対しては、留保つきで聞いておりました。

ところが3月になって、今度は上院の安全保障軍事委員会に、ラッセル次官補がまたもや出席したのです。そして下院におけるよりももっと厳しい言葉で、中国批判を繰り広げ

ました。そして我々は日本の立場をよく理解すべきだ、と言う言葉もそこには出て参りました。中国がトラブルメーカーなのだという表現も使いました。そのとき私は改めて、しっかりと彼のスピーチを読みました。それが3月下旬です。そうしたら、4月に入って、またもや同じ人物が同じ上院の委員会に出席をして、きちんと説明をしたのです。つまりアメリカは、いったん中国にシフトした、日本よりも中国なのだとシフトしかけたのを、今少し軌道修正し始めているのではないかと読みとれるのです。

日本国憲法にしばられてはならない
美しい祖国日本を誇りある国へ

オバマ大統領も、国賓としてお招きしたにもかかわらず、この慌ただしい日程は、私は大変不満であります。けれども、限られた時間の中で、オバマ大統領がどういうメッセージを出すのか、既に新聞などでは予測がいくつか出されております。尖閣諸島に対して日米安保条約第5条が適応されるという事を、オバマ大統領が書簡で日本国政府に送ったという報道がありました。今まで尖閣諸島が、第5条の適応対象であるという言葉は、国務長官と国防長官からは出ているのですが、大統領自身は今まで一度も具体的に言及したことがないのです。ですから今回の来日に当たってそのことをおっしゃるのであるならば、大統領として、つまり、国家の最高指導者としてまさに、きちんとコミットをする事になると言う意味であります。オバマ大統領が、このように日米関係重視という所にもう一度立ち戻ってくださるのは大歓迎であります。

しかし日本としてもう一つ考えなければならないことがあります。明日の日米首脳会談で、いかなる親日的なメッセージが発信されたとしても、メッセージはメッセージなのです。南シナ海において、アメリカは、言葉の上ではしっかりコミットしているのです。

南シナ海はどこか一国の海ではなく、開かれた海であるべきであり、アメリカとフィリピンの間には、米比軍事協定があるというのが、アメリカ国務省のフィリピンに関する正式な立場の表明です。でもフィリピンは今、中国の脅威の前に2つ目、3つ目の島を取られ始めています。これに対してアメリカが本当に何をするのかというと、予測によっては、スービック、クラーク2つの基地をもう1回復活すると言うようなこともありますけれども、私たちは、アメリカオバマ政権第2期があまりにも行動してきませんでしたから、そのことを知っているだけに、もはや言葉だけでは信用できないというところに来ているわけです。日米関係に関しても、すばらしい言葉でコミットしてくださるのは、本当に感謝致しますし、ありがとうございますという気持ちでありますけれども、その先の行動となると、これは、全て言葉を信じて頼っていては、日本国が危うくなると思います。

今こそ日本は、アメリカの内向きの傾向、中国の限りない膨張主義、軍国主義、その2つの大国に挟まれている日本ですから、これを奇貨として、戦後の日本国のあり方を根本から変えなければならないのです。日米安保条約によって守られるだけの国であってはならないのです。あの憲法に縛られ続けてはならないのです。憲法を見てみましょう。皆さん方はもう私よりも遙かによく知っているはずです。あの憲法は、日本人の憲法ではないのです。憲法に込められている意味は、私たちの文化とは何の関係もないのです。第3章、国民の権利及び義務を見れば、いかにあそこに盛られている価値観が日本人をだめにするものであるかというのが、よく見えてきます。憲法前文を読めば、私たちの国がいかに脳天気な、自己責任が全くない、誇りもない、伝統もない、民族の文化の香りもない、どこの

誰だか、馬の骨だか牛の骨だか、分からないような存在におとしめられていると言う事はもうお分かりでしょう。それを具体化したのが、憲法第９条であります。このようなつまらない憲法第９条に、六十数年間も、忠実に生きてきた私たちは、アメリカに腹の底でどのように見られているでしょうか。なんだろうこの人達は。なんだろう日本人とは。誇りの欠片も無いのか。くみするにやすし。こんなのはいつでも無視していいのだ、アメリカの後さえくっついて来させればいいんだと、私がアメリカ人ならそう思います。中国人、ロシア人、日本国を窺う人々もみんなそう思うでしょう。でも我々は、根無し草の名無しの権兵衛の民族ではないのです。私たちは、日本国民なのであり、日本国なのだと言うことを、今、示さなければならないと思います。

先日東南アジアの人々の世論調査が出ていました。日本が大好きだそうです。日本国にもっと強くなってほしい、日本国こそ、中国を抑止できる力である、この日本と歩みを共にしたいという、東南アジアの国々の希望がはっきりと出ている世論調査でありました。彼らは何故に私たちを尊敬するのでしょうか。彼らは何故に私たちを頼るのでしょうか。それは彼らの心の中、記憶の中に、あの大東亜戦争で果敢に戦った、日本民族のイメージが残っているからです。

戦後アメリカに占領され、すさまじく愚かな憲法を与えられました。その憲法に縛られているという事は彼らも知っていますけれども、でもただ縛られているだけで、日本人の心が変わってしまったわけではないと、彼らは思っていると思います。そのことを今私たちが証明しなければならないのです。証明することによってアメリカにもう一度、「あなた方の本当のパートナーは、中国人ではないのですよ。立派な侍の国の、日本国であり、日本民族ですよ。私たちと共に歩むのが、アメリカにとってもいいのですよ。世界のその他の国々にとっても、一番良いことでしょう。私たち日本人も、その責任を引き受けます」と、そのように、アメリカに日本国の姿勢を見せていくことによって、アメリカは、日本を見直すだろうと思います。中国もまた、日本に対して、やすやすと横柄な蛮行に及ぶことはできないだろうと私は思います。

考えてみたら、私たち日本人は、本当に長い間我慢に我慢をしてきたのだと思います。天皇陛下ではありませんけれども、堪え難きを堪えて来たのは、この戦後であります。ですから、私は皆様方の活動に本当に敬意を払います。ひとときも、英霊の日本国に対する貢献を忘れた事が無く、英霊の皆様方に感謝をし続け、そして英霊の皆様方に、どうぞこの美しい祖国日本をお守りし続けてくださいとお願いし、私たち生きている人間は、この美しい祖国を誇りある国に、もう一回仕立てて、守り続けたく、その心を英霊に支えていただきたいという、そのような価値観で活動してきた皆様方に、私は心からの敬意を払うものであります。

結び

国際情勢が混沌としてアメリカも頼るに足りないかも知れません。中国はいくら警戒しても、したりないかも知れません。どの国も必死に生き残る道を探しているとき、私たちが生き残る道は、日本国の本来の姿に立ち戻ることしかないだろうと思います。その意味で、私は日本国を守ってくださる神々は、うまく人材を配してくださったと考えているのです。今、安倍晋三さんが総理大臣でいらっしゃると言うことは、天佑だと思います。自民党政権だというだけでは足りないのです。自民党にも必ずしも立派な人ばかりではなく、変な人もいるわけですから、自民党安倍政権が続く間に、皆様方のお力、そして中條先生

のお力、多くの方々のお力を結集して、日本国のために殉じた英霊の皆様方が、良かった、私の命をこの国に捧げた意味があったと、この日本の上空のどこかから見守りながら、そう感じてそうつぶやきあってくださる日が早く来るように、がんばりたいと思います。私はこの会に合流させていただいたばかりであります。一体何をしたらよいのかまだ分かりませんけれども、先輩の皆様方のよろしきご指導を受けて私なりの力を尽くして参りたいと思います。

これから末永く宜しくお願い致します。今日は本当にありがとうございました。

櫻井よしこ氏 略歴

ベトナム生れ。ハワイ州立大学歴史学部卒業。「クリスチャン・サイエンス・モニター」紙東京支局員、アジア新聞財団「DEPTH・NEWS」記者、同東京支局長、日本テレビ・ニュースキャスターを経て、現在フリー・ジャーナリスト・平成十九年十二月「国家基本問題研究所」を設立し理事長に就任。

偶感

英霊にこたえる会中央本部　会長

靖國の神々のつぶやき

この随筆は、平成18年8月31日付の「朝雲」の「春夏秋冬」欄に掲載されたものである。安倍総理の靖國神社参拝で靖國問題がさまざまな観点から、国内外の注目を浴びている今、もう一度、靖國の神々のつぶやきを!!との思いで転載したものである。（事務局）

「天皇のつぶやき」がお側に仕えた冨田長官メモのように簡単に公開されるのでは、今後、天皇は貝になられ、つぶやきはなくなるであろう。この僅かな心の表現とも考えうる「天皇のつぶやき」を疎外するような行為は、お側に仕えるものに絶対あってはならない。靖國に眠る英霊たちはそのつぶやきすら出来ない。筆者は軍人の道を進み、生き残った。靖國の社頭に立つと、いま生きていること自体申し訳ないという気になる。靖國の近くに居を構え、四十数年間、雨の日も嵐の日も靖國詣でを続けてきた。

昨今の靖國論議を聞く度に胸が痛む。何を言われても、何ひとつ抗弁も出来ない靖國の神々のつぶやきが聞こえてくるようだ。

「や」の命（みこと）　靖國に行く、行かない。公的か私的かと騒々しいが、俺達のことで国論が割れるのは耐えられないし、一番辛い。来たい人だけ静かにお参りしてほしい。

「ま」の命（みこと）　首相も約束通り八月十五日にきてくれてそれなりに嬉しい。俺達は日時にこだわらないが、明治維新の時の人もおいでだから、春秋の例大祭が一番いいかな。天皇さまもこの日に勅使を派遣してお供えをお届け賜るよ。

「と」の命　中国、韓国はA級戦犯が合祀されているからけしからんと何癖をつけているが、今度の大戦では中共や韓国とは誰一人戦っていない。それどころか毛沢東は日本が蒋介石を叩いてくれたから建国出来たとはっきり言っているぜ。

「だ」の命　東京裁判は国際法上の汚点であり、マッカーサー自身がその間違いを上院で告白した。印度代表パール判事の陳述書を国民の皆さん、特に政治家は読んでほしい。

「ま」の命　「サンフランシスコ条約11条」も心静かに読んでくださいよ。法律で言う救済条項の後半部分を特に念入りに。二十八年に国会でも与野党一致で名誉回復の立法をしてくれたのです。刑死した遺族には年金も払って頂いているのです。

「し」の命　その通りです。立法府の者は全員その時の議事録を読むべきです。法治国家で名誉回復されているのに平気で「A級戦犯」と口にするだけでも立法府に参加する資格がありません。

「い」の命　俺たちは悔いてはおりません。国の平和や自由はただでは手に入りませぬ。靖國に来たら戦争の残酷さ、平和の尊さがよくわかるはずです。

月刊誌「致知」の〔巻頭の言葉〕転載

おふくろのおしめ

～母親の無償の愛～

豊かさに感謝する心を

かつて『おしん』というドラマがわが国で大人気となった。そしてアジアの諸国でもてはやされた。

ほぼ五世紀間にわたった西欧列強による植民地化の荒波を辛うじて免れ、近代化に成功し、その決戦とも言うべき日露戦争（一九〇四～〇五年）に勝って、心の自由と民族の誇りを得たものの、庶民の生活は極めて貧しかった。

豊饒の海に酔い痴れるいまの若者たちには想像のつかないほどの貧乏であった。

文字の読めない人すらいたが、皆、凛として生きていた。いまさら貧乏を勧める気など毛頭ない。豊かさは全人類の目指す課題だから、そのこと自体悪かろうはずがない。だが、識者の多くが、豊かさにたどりつくと、目指すエネルギーが弱くなり（夢見なくなる）、耐える力が萎えると説く。

人は常に感謝の想念に裏打ちされて生き続けなければ、人生を誤ることが多い。

豊かさの実感を肌で感じ、感謝する心を養うには、先人たちの生き抜いた実相を伝えることこそ最高の説得であろうと思う。

己を捨て、相手を立てる

筆者の尊敬する平辰さん（日本の台所を任じる㈱大庄の社長）の母親の実話をご紹介しよう。

平成十七年、平さんのお母さんが天寿を全うされてこの世を去られた。この時のご挨拶のエッセンスをありのままにお伝えする。

「私たち兄弟は佐渡の生まれ、島で育ち、十八歳の頃上京しました。亡くなった母は現代版『おしん』かもしれません。

祖父に子供がなかったので、末弟（私の父）が世継ぎとされ、父は海軍の軍人でしたので、船に乗っており、婿殿不在の平家に嫁いだのが母の八重でした。（中略）

母は、子供たちのおしめ（おむつ）を古着の布の切れ端で縫い、汚れたおしめは、凍りつく川に運び、洗ってくれました。

冬の雪の降る日でした。母のその手は、あかぎれで割れ、腫れ上がっていました。血の出てくる割れ口には、ご飯粒を詰めることで

耐えていました。

そんな手であっても、「子供には少しでも温かいおしめを……」と赤ん坊が汚したおしめを洗ってコタツで温めておいてくれました。

食事をしながら、子供におっぱいを飲ませている時など、ビリビリと下痢のうんちをし、抱っこしている母の腿が熱くなってくると、食事を中座して、そのおしめをはずし、下痢でただれたお尻を、母は舌で舐め取っては吐き出し、吐き出しながらコタツで温めてあったおしめを取り換えるのでした。

いまのように柔らかい紙はなく紙といえば新聞紙くらいのものでした。また、柔らかい布もなく、おしめも布を縫い合わせているので、それで拭けば赤ん坊のお尻はさらに赤く腫れ上がってしまいます。

母は、「子供が痛かろう」と自分の舌で、その下痢のうんちを舐めて拭き取り、その口で再び食事を摂ることも度々ありました。

母は毎朝四時に起き、十二人の家族の朝食を作りました。そのまな板のトントンという音で私は目を覚ます毎日でした。

朝食が済むと肥料の糞尿を大きな細長い肥桶に入れ、天秤棒で担ぎ、一時間もかかる蛇の多い山道を、山の田や畑に運んでいきました。足をすべらせ肥桶ごと倒れ、うんちだらけになった思い出もあります。

野良仕事は、夜八時、九時に終わることも多く、常に星を見なければ家に帰ることはありませんでした。

母が上京する時には、足が悪いのを忘れたかのように、米だ芋だと重いのにもかかわらず持ってきてもくれました。

昭和五十七年、やる気地蔵を祀った「やる気茶屋」を始めた時、五十キロもある石の地蔵さんを背負って佐渡からやってきてくれて、びっくりしました(筆者はこの時からの御縁)。

母が死を覚悟した時だと思われますが、私に話しかけてきたことがありました。『私はもう畑にも出られん。田圃にも行けん。仕事が出来なければ、人のためにならん。たとえ我が子であっても迷惑はかけたくない』と言い、その後自らの食を細めて〝水〟のみとし、大樹が枯れるが如く心臓を静かに止めていったのだと思います。

美しい　死にかた求め　自らの
食を細めて　枯れていく

偉大なる母に、無償の愛の尊さと大将の道をお教えいただきました」(原文そのまま)

並居る参列者の悉くは感電した如く感動の坩堝に浸った。まして五十七年から平さんと御縁をいただき、お母さんと度々お会いした私には、そのお顔からはとても天秤棒の肥桶を担いだ母親像は浮かんでこなかった。それどころか、すべての人間を抱き締めてくださる慈愛溢れる聖母観音像のようなお母さんであった。

この親子に接すれば接するほど「この親にしてこの子あり」の感を深くする。親の躾の大切さをしみじみと感ずる。

誤解のないよう特に若い母親の読者に告げたい。

生んだ母親が子をなめて育てるなど動物界の常識であるが、文明開化のいまの世に、このような非衛生的な育て方をしなさいと勧めるのでは決してない。こうまでして育てた母親の無償の愛。己(母親)を捨て、相手(子供)を立てる真実の愛を摑み取ってほしい。

この真実の愛を理解した母親のみが、我が子が成長した日、「ならぬことはならぬ」と厳しく躾ができるという「陰陽の理」をしっかり学んでいただきたい。

総理及び閣僚等の靖國神社参拝を定着させましょう！

平成27年版

靖國（やすくに）カレンダー

英霊にこたえる
一億国民のこころを結集しよう。

◉靖國神社への総理・閣僚の公式参拝を定着させましょう。

◉「靖國神社は、我が国の戦歿者追悼の中心的施設である」
国家、国民がこぞって戦歿者英霊に感謝の誠を捧げましょう。

◉英霊顕彰の国民運動の輪をひろげましょう。

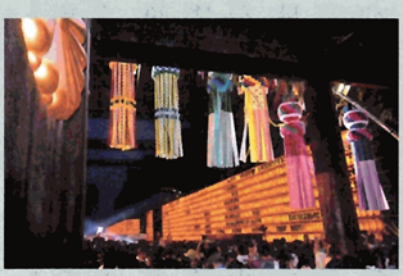
「靖國カレンダー」を一家に一部掲げましょう。

1-2月 靖國神社初詣風景

▲これは縮小版です。原寸は縦54.5×横36cmです。

3-4月 靖國神社の桜

5-6月 御祭神93,000余柱・愛知縣護國神社



7-8月 期間中約33万人の人出で賑わった
平成25年靖國神社みたままつり(毎年7月13日～16日)

9-10月 御祭神63,490余柱・茨城縣護國神社

11-12月 雪の靖國神社

※カレンダーの絵柄については、
多少変更する場合がございます。

英霊にこたえる会